

ナウマン博士ゆかりの人と所をたずねて

Ⅲ. シュタルンベルク湖

山下 昇¹⁾

1. ナウマン博士の学位獲得

杭上住居址の場所は？ 一昨年(1990年)9月23日、ミュンヘン古生物学博物館のマイヤー博士に宛てて質問の手紙を書いた。ナウマン文書を読み進むうちに、ナウマンの博士号請求論文の表題が「シュタルンベルク湖の杭上住居址の動物群」であること、またその動物群というのが馬・牛・豚などの哺乳動物であることが分かったので、ドイツへ行ったら、その標本とそれを産した遺跡とを見たいと思ったからである。

マイヤー博士からは即座にファックスで返事が送られて来た。

- 1.) 標本は、1944年7月の爆撃で破壊された。
- 2.) 「杭上住居址」の位置は、小さな島(ローゼンインゼル)である。シュタルンベルクへはミュンヘンから列車で約半時間、ローゼンインゼルへはモーターボートまたは手漕ぎのボートで渡ることができる(15分)。
- 3.) 遺跡の年代は、紀元前5000年である。

そこで、ローゼンインゼル(薔薇島)が訪問先の一つに組みこまれた。

1/5万地形図。他方、東京青山の地図専門店へ出かけてドイツ各地の地図を探した。その店で、

「もっと詳しい地図はありませんか？」と尋ねたところ、

「1/5万の地形図ならありますけど…」という返答が返って来たのには驚いた。その返答の様子からは、

「たいへん詳しいけれども、読み方が難しいので、素人さんには使いこなせるかどうか疑問ですよ」という雰囲気が感じられる。ところがこちらは、そ

れこそ望むところである。聞いて見ると、注文を受けて1週間以内に取り寄せられるという。

こうして手に入れた地形図は、1図幅が東西20分、南北12分(日本のものは15分×10分)、ミュンヘン図幅(48°00'~48°12'N)で49.6×44.4 cmである。一見した感じはスイスの地形図によく似ている。というのは、全体が緑っぽく、地形の表現が茶色の等高線に加えて、北西上空から光が当たっている条件のもとで薄墨色の陰影がつけられているからである。異なるのは、ドイツの地形図では国道級の道路が橙色、主要地方道が黄色または紅色に塗ってある点である。

面白いことに、湖の深さは等深線でなくて海拔の等高線——陸地の等高線と違って青色——で示してある。だから深さを知るには、文字で記入してある平均水面高度を基にして計算しなければならない。

ローゼンインゼル。その地形図によると、ミュンヘンの中心から南西20 km にシュタルンベルクの町がある。この町はシュタルンベルク湖の北端にある。湖そのものは南北に細長く約20 km である。その西岸ぞいに、北端から南へ7 km の所にフェルダフィnkという村があって、その湖岸から150 m 沖に、直径150 m の小島が浮かんでいる(第1図)。島の輪郭は南へ尖った正三角形に近いが、南西方向に小さい半島が突き出ている。

この島をたずねた日は快晴で無風、まことに清々しい天気であった。水は透明で、もちろん空缶などは落ちていない。白鳥がいる。数種類の鴨のような水鳥が泳いでいる(写真1)。時々舞い上がってはまた降りて来る。20 cm ほどの魚がいて、これももちろん泳いでいる。

島に渡る時間がなかったのは残念であったが、鬱

1) 信州大学名誉教授：〒153 東京都目黒区青葉台4-2-2

キーワード：ナウマン、ローゼンインゼル、博士論文、ノイシュヴァンシュタイン城、ルートヴィヒ二世、レオニ、森鷗外、『うたかたの記』

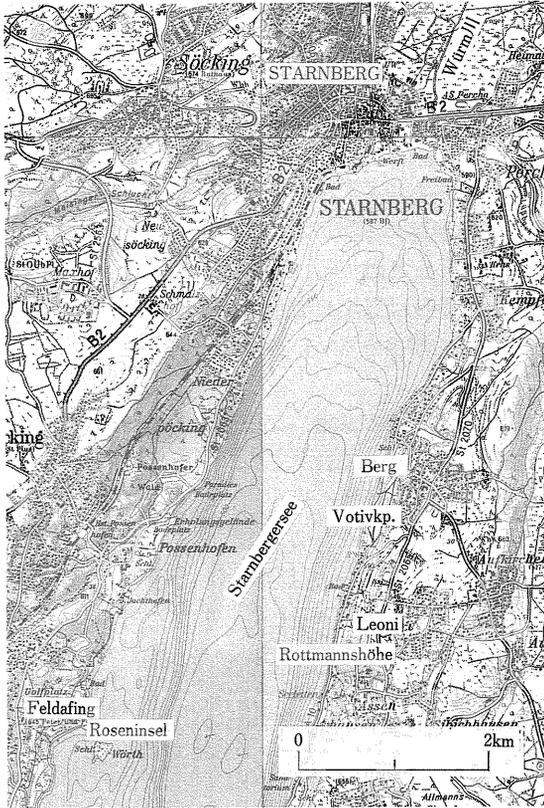


写真1 ローゼンインゼル。

この島にある7000年前の遺跡から出土した哺乳動物化石がナウマンの博士論文の材料となった。

橋に並んで腰をおろし、脚をぶらぶらさせている。その態度や仕ぐさは日本の同じ年ごろの少女たちと少しも変わらない。

はるか彼方にはアルプスの前山が見えていて、北部石灰岩アルプスに特有のスカイラインを描いている。

栈橋の右手には小さな案内板があって、杭上住居址は4000年前のものとして書いてある。ただし、私はもちろんマイヤー博士の紀元前5000年という回答の方を信頼している。

博士論文の概要。 ところで、ナウマン博士の学位論文の概要は次のとおりである。マイヤー博士からいただいたコピーは1875年の「人類学文献集」Ⅷ巻1号に印刷されたもので、26.6×20.2 cmの大ききで51ページ、それに加えて巻末の図版が4ページである。序文によると、この化石資料はシュタルンベルクに住む判事のシャープ氏が長年にわたって集めたもので、その量は25セントナーすなわち1250 kgに達するという。化石を含んでいるのは砂層を伴う泥炭層で、泥炭中の化石は保存がよいが、砂層中のは保存が悪い。大部分は人為的に割られている。

鳥類には鶯鳥や白鳥のほか鶏がある。哺乳類の中には野獣と家畜とがあるが、後者は前者の2倍に達する。すなわち次のとおりである。

野獣

鹿	19 %
猪	7 "
ノロシカ	1 "

第1図 シュタルンベルク湖の北部。

シュタルンベルク湖はまたの名をヴェルム湖という。その北端から流れ出る川がヴェルム川、つまりヴェルム氷期の名の元である。湖水面は海拔584 m、典型的な氷河湖で、周囲は比高100 m前後のモレーンの丘陵である。図の左下の小島がローゼンインゼルで、この遺跡から出た哺乳動物化石がナウマンの博士論文の材料となった。

東岸のベルクの城は、追放されたバイエルン国王ルートヴィヒ二世が収容された所。その南の礼拝堂(Votivkapelle)は王が水死した地点。レオニの湖岸にホテルレオニ、すなわちかつての“レオニ客舎”がある。森鷗外はここで「駁ナウマン論」の原稿を書き始めた。その南のロットマン丘(Rottmannshöhe)は、鷗外がたびたび散歩に出かけた所。

蒼たる広葉樹の森に覆われている。島そのものは低く、決して岩山ではない。おそらく洲なのであろう。

こちら側のベンチには老人夫婦がやって来て弁当を広げている。その向こうでは老婦人が5歳くらいの女の子を遊ばせている。しばらくすると中学生くらいの少女の一団がやってきて、木造の簡単な栈

熊	1	〃
ビーバー	1	〃
その他	2	〃
	31	%
家畜		
牛	33	%
豚	21	〃
羊	6	〃
馬	4	〃
犬	3	〃
山羊	2	〃
	69	%
	100	%

なお、野獣の「その他」の中には、狐、野牛、バイソン、大鹿、かもしか、山羊、兎、山猫、狼などが含まれている。

特に詳しく検討されているのは、馬、豚(猪)、鹿、牛、犬などである。

人骨も比較的が多いというが、資料としての質はあまりよくない。ただ、短頭で体が大きく頑丈だという。

考察の部では、家畜の問題がいろいろと検討されている。その上で、ここに人が住んだのは石器時代から青銅時代を経て歴史時代にまで及んだと推定している。

博士論文の成績は優秀であった。この論文を通読すると、彼が後に書いた「先史時代の日本の象について」という論文とよく似た印象を受ける。すなわち、記載は克明であり、考察は堂々としている。この論文を審査したチッテル教授の評価は次のようであった。

すなわち、哲学部第Ⅱ部の正教授諸氏に宛てた通知の中で、「哲学博士候補者、エドムントナウマン氏は、就学期間等の点で博士試験を受ける条件を満たしている」という説明に続けて、

「添付された論文は、志願者〔ナウマン〕の綿密さと科学的能力の証拠を十分に証明している。それは、細心にして整然たる研究、ならびに関係文献の詳細な検討に基づき、これまでにドイツにおいて記載された杭上住居址の最も豊富な動物群の完全な像を与えている。この論文は、大綱において、スイスの杭上住居址の動物群に関するリュティマイヤーの

以前の業績に依拠しているが、ナウマン氏は、この杭上住居址から産したある一定の種（たとえば馬、泥炭雌牛、泥炭豚など）の、現生の類縁種に対する位置に関して新しい観点を開陳することを試み、かなり好い成果をあげている。」

と書いている。そして、この後に、先に紹介したジーボルト教授の添書が書いてある。

なお、泥炭雌牛、泥炭豚は Torfkuh と Torfschwein を仮に直訳しておいたもので、単に泥炭層から産した雌牛あるいは豚という意味であるのかも知れない。

博士試験とその成績。 博士試験については、次の文書をそっくり紹介するのが一番確実で、かつ分かりやすいであろう。

ミュンヘン、1874年12月9日

1874年12月9日に実施された

マイセン出身の エドムント ナウマン氏の

博士試験に関する議決書

口述試験に出席した諸氏：

von Siebold

von Schafhüttl

von Kobell

Vogel

下に署名している学部長

この試験のために、規定に従った招請が発せられ、学位取得準備者〔ナウマン〕が12月9日10時に、下に署名している学部長の研究室（古生物学博物館の中の）に来訪したので、署名者〔下に署名している者の意味で、具体的にはチッテル学部長自身のことである〕によって出題された三つの問題が、封をして彼に手渡された。これを開封の後、学部長の監督のもとで、学位取得準備者はただちに筆記による答案作成を開始し、正12時、これを提出した。

同日午後5時、口述試験が開始され、まず主題に関して学部長により、次に動物学に関して同僚のフォンジーボルト氏により、そして最後に地質学に関して同僚のシャフホイトル氏により、口述試験が行われた。

6時半に試験が修了した後、学位取得準備者が退席したうえで、試験の答案について投票が行われ、学位取得準備者に対し、主題に関しては評点Ⅰ、動物学に関しては評点Ⅱ、地質学に関しては評点Ⅰ、

したがって総合点としては評点 I が与えられた。

v. Siebold Zittel (現学部長)
Schafhäutl Kobell
Vogels

公開講演とその防御。 この後、ナウマンの公開講演が行われた。学部長チッテル博士の名で発表された公示の内容は次のとおりである。

マイセン出身の
エドムント ナウマン氏 は
1874年12月22日 金曜 午前11時
大学の大講堂において
最高の哲学学位を獲得するために
後記の諸論題を
公開のもとに防御するであろう。

この儀式に
学長閣下、
評議員諸氏、全学部の教授、学生、ならびに
すべての学問の友人
を招待する。
博士 カルル アルフレード チッテル
正教授、現哲学部第二部部长

なお、この中にある「防御」というのは、聴衆から発せられる質問や批判という形での攻撃に対抗して、講演者がりっぱに答えてみずからを防御する、という意味である。

その講演において、ナウマンが取り上げたテーマは次のようなものであった。

論 題

1. 肺魚類は硬鱗類の主幹からの早い時期における分岐と解釈される。
2. 鳥類の始祖は鳥座骨目のうちに存在する。
3. 原始有蹄類は五指であったと推定され、それは白亜系中に発見されるであろう。
4. アプティクスはアンモナイトの雌の卵包腺 Nidamentaldrüsen の蓋と考えられる。
5. ある種の Thonsteinporphyre [訳語不明] は海底の凝灰岩と解釈される。ヒン岩は一般に、その成因に関して、それに隣接する松脂岩とは本質的に何ら関係がない。
6. 原始の石灰岩層の石墨は生物起源である。
7. 片麻岩は堆積性である。
8. Thalassiten [不明、亀類の一群か?] の

mediane Entoplastron [中央内腹甲?] は、他の脊椎動物の Interclavignula [間鎖骨? clavignula は clavignula の誤りか?] に相当する。

9. 滴虫類は単細胞である。
10. 種 *Equus caballus* L. [ウマ] のさまざまな品種は、少なくとも二つの化石祖先型に帰着する。
11. ヨーロッパの洪積層には3種以上の *Equus* 属を産する。
12. 爬虫類は二畳紀より前に存在していたに違いない。

この講演の内容は、博士論文の内容とはあまり関係がないように見えるが、それはどういう訳か、とスモルカ氏に質問したところ、「博士号を獲得する」については、単に博士論文で取り扱った問題だけでなく、もっと広い範囲の知識を備えている、ことが要求される。そのことを示すために、このように広範な諸問題を取り上げて講演したのである、と。

最優秀という学位記。 ナウマン文書の中に、日本風にいえば学位記に当たるものがある。それは全文がラテン語で書いてある。これをハイデルベルク大学のライヘルト博士(Dr. Folker Reichert)がドイツ語に訳し、それをさらに西本由美子夫人が日本語に訳して下さった。それを全文そのまま紹介すると、大変分かりにくいものになる。なぜかという、一番下の2行を除いて、あとの全部がひとつながりの長い文だからである。

そこで、この文書を大きく眺めると、特に大きな文字で書いてある所が目につく。最大の文字は「ルートヴィヒ二世」であり、その下の行はバヴェリア(バイエルン)王という意味である。次に大きいのは9行目で、これはミュンヘン大学学長のヘッカーである。そして、その下の三番目に大きな文字は学部長のチッテルであり、さらにその下にエドムントナウマンの名が見える。その下の小さい字はザクセンのマイセンであるから、ナウマン博士の出身地を示しているに違いない。さらにその下の大きな文字が、哲学博士の学位である。

さて、そこまでは特にラテン語を知らなくても見当がつくのであるが、ここに出て来る四人の名前は、どのような関係にあるのだろうか? この長い文の中から、修飾語の大部分をとり除いて、文の骨格を取り出して見ると、次のようになる。

「バイエルン国王ルートヴィヒ二世の光栄ある治世のもと、高名にして権威ある学長ヘッカーのもと、高名にして権威あるチッテルは、よく勉強したナウマンに、哲学博士号を、1874年12月22日に授与した。」

もっと簡単に、一つの文として不可欠な言葉だけに限ってみると、「チッテルはナウマンに哲学博士号を授与した。」となる。

ただし、我々にとってもう一つ重要なのは、「summa cum laude(最優秀)の成績で合格した厳格なる博士試験の結果」という語である。スモルカ氏に尋ねたところ、この成績は、10年に一人現れるかどうか、という大変な成績だということであっ

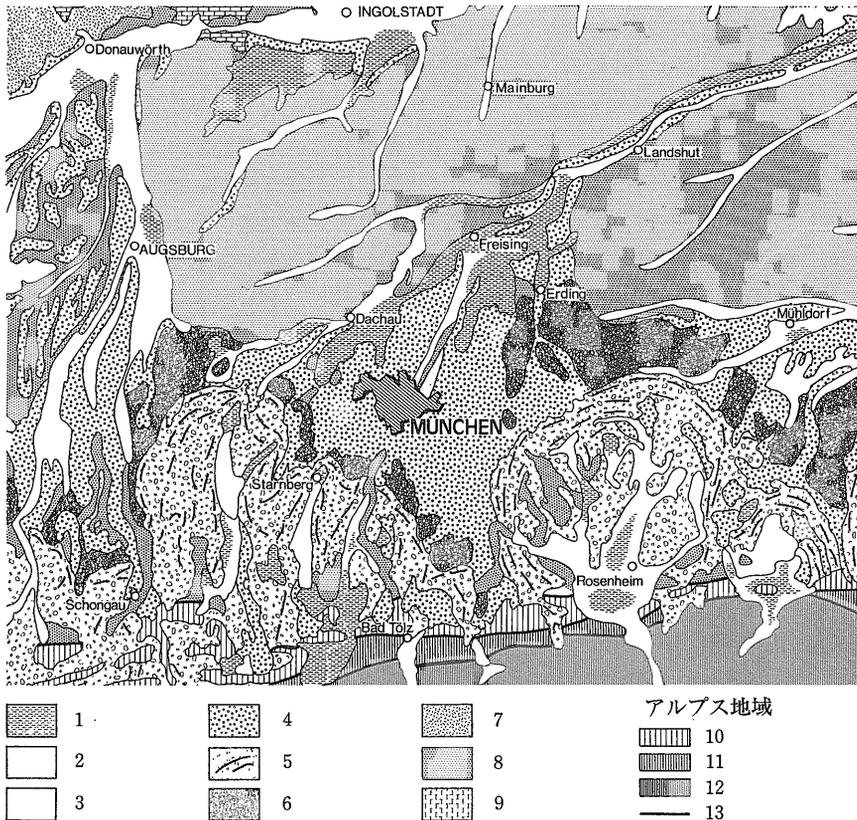
た。

その後、ゲーテ大学のムラウスキー博士に伺ったところでも、この成績は稀に見る素晴らしいもので、20歳で博士号を獲得したというのも、これまた大変なことであるという。

なお、ナウマン博士自筆の履歴書をたんねんに調べてみると、彼が博士号の学位を取得したのは、ミュンヘン大学在学中のことであった。

2. ミュンヘン付近の地質

ここで、この後の記述のためにも、ミュンヘン付近の地質を簡単に眺めておくことにしよう。幸いに

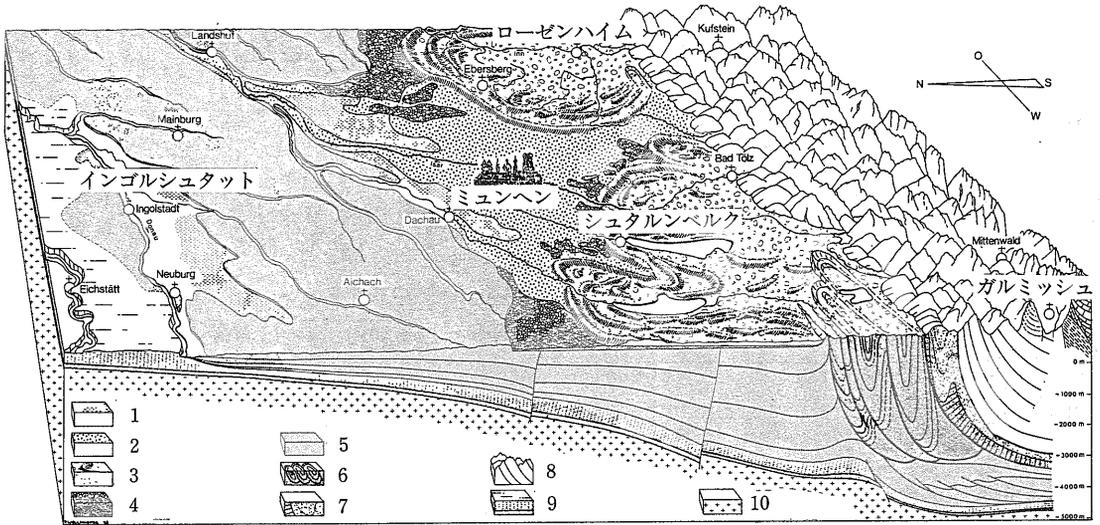


第2図 ミュンヘン付近の地質図。

ミュンヘン古生物学博物館の冊子「砂礫層と骨」から。

凡例は左上から順に、1:湿地、泥炭地 2:現世の河成～湖成堆積物 3:ローム、レス 4:氷河のアウトウォッシュの砂礫層 5:ヴェルム氷期のモレーン、太い線はモレーンの丘陵の尾根 6:古期のモレーン（ミンデル、リスなど） 7:第三系（北部で平坦な地層） 8:第三系（南部で非褶曲の淡水成モラッセ層） 9:ジュラ系 10:褶曲しているモラッセ層 11:ヘルベチア帯とフリッシュ帯 12:石灰岩アルプス 13:断層。

この図にはスケールがないが、東西約175 kmである。



第3図 ミュンヘン付近(第2図)のブロックダイアグラム。

ミュンヘン古生物学博物館の冊子「砂礫層と骨」から

凡例は左上から順に、1:完新世の沖積地、泥炭地 2:ミュンヘンの砂礫層(アウトウォッシュ)平地 3:ヴュルム氷期のモレーン 4:ミンデルおよびリス氷期のモレーン 5:第三系(非褶曲のモラッセ層) 6:第三系(褶曲したモラッセ層) 7:フリッシュ帯とヘルベチア帯 8:石灰岩アルプス 9:フランケン(図の左端)のジュラ系、および断面図のジュラ系と三層系 10:基盤の花崗岩・片麻岩(断面図)

して、前に紹介したミュンヘン古生物学博物館発行の「砂礫層と骨…」の中に、ほどよく簡略化された地質図とブロックダイアグラムがあるので、それを借用することにする(第2・3図)。

順序として、まず基盤岩層を南から北へ見ていき、その後で表層地質に移る。

北部石灰岩アルプス。 地質図の南縁で中央から東方にかけて、凡例に石灰岩アルプス(Kalkalpin)と書いた山地がある。ブロックダイアグラムでは右端のギザギザの山地がそれである。アルプス全体の観点からいうと北部石灰岩アルプスと呼ばれる地帯の北縁部である。

北部石灰岩アルプスはドイツとオーストリアの国境に沿って、幅40 km 前後、東西400 km 以上も続き、東アルプスでは最も明確な地帯をなしている。ほとんどすべて石灰岩～苦灰岩から成り、アルプス型三層系～ジュラ系の模式地である。その岩質のために独特な地形をなし、遠方からでも山の形だけで、それと判定できる。

ミュンヘンの南ではドイツの最高峰ツークシュピッツェ(2963 m)がこの地帯に属し、また東方のザルツブルクの城はこの石灰岩の山の上にある。さらにこの地帯の東端の地域がウィーンの森である。

フリッシュ帯。 地質図の凡例にはヘルベチア帯とフリッシュと書いてあるが、ヘルベチアとは本来スイスのことである。スイスではアイガーやユンクフラウなど、ペルナーオーバーラントの石灰岩の山々がこの地帯に属し、地形の点からは高石灰岩アルプスとも呼ばれ、幅広くかつ高く、顕著な地帯である。ところが東アルプスでは、幅せまく低く、極めて貧弱である。また、フリッシュは本来ヘルベチア帯の中の一部(一岩相)をなすもので、泥岩・砂岩および一部では礫岩が顕著であり、炭酸塩岩はきわめて少ない。東アルプスにおけるこの帯の幅は10 km 前後、場所によっては途切れている。

現地を歩いているときは、その背後の石灰岩アルプスの方が高く険しく、その山々に目をうばわれるので、フリッシュ帯の山は、つい見落としてしまう。筆者は1981年にミュンヘン地質調査所のエクスター博士(Dr. H. J. Exler)とツィークラー博士(Dr. J. H. Ziegler)に案内していただいて、渡辺晃二・小坂共栄の両博士とともに少し東方のフリッシュを見学したことがある。そのときは大型・小型の貨幣石(写真2)がザクザク採れて大感激であった。

褶曲モラッセ帯。 地形の点から見ると、上記の石灰岩アルプスとフリッシュ帯までがアルプス山地

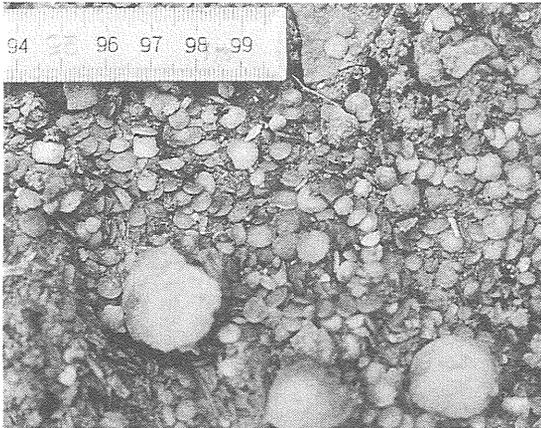


写真2 フリッシュの貨幣石。

石灰岩アルプスの北に、細長くフリッシュ帯が発達している所がある。泥質岩の山だから目立たないが、始新世の貨幣石を含んでいる。直径1 cm以下の顕球型がぎっしりと密集している中に、3 cmほどの微球型がばらばらと散在している。キーム湖とザルツブルクの中間のトラウンシュタインの南。

に属し、モラッセ帯から北方はアルプス北麓の平野の地域に属する。

モラッセはもちろん第三系の漸新統～中新統で、砂岩・泥岩・礫岩から成り、厚さ数千メートルに達する。だから、年代は少しずれるが、日本の新第三系に似ている。ただし、火山噴出物の量は極めて少ない。ブロックダイアグラムの断面図に示されているように、アルプス山地に接する部分は強く褶曲しているが、それより北方ではほとんど水平な構造をなしている。

ところで、この地域は広く第四紀の氷河堆積物に覆われているので、その下にあるモラッセは、なかなか見ることができない。前回のスイス旅行では裏通りの細い道路に入ってようやく露頭を見ることができたが、今回はアンメル川の峡谷を渡るとき、車の窓から一瞬ちらりと見えただけであった。

その点は残念というほかないが、興味深いのは、褶曲の末端の半盆構造が地形に明瞭に現れていることである。すなわち、硬い岩層から成る部分がいくらか高く浮き出て、東西に長く続く山稜を形成している。ただし、モラッセを覆う氷河堆積物もまたかなり高い——比高100 mほどの——丘陵を成しているので、車窓から明確に区別するのは困難である。

卓状モラッセ帯。 これは凡例では上部淡水成モラッセ(新第三系)と書いてあるもので、ブロックダイアグラムの断面に示されているように、ほとんど水平な構造をもっている。ただし、広く露出しているのはミュンヘンより北方の地域であって、南方では大部分が氷河堆積物に覆い隠されている。

ジュラ系。 地質図の左上に僅かに分布している。左上のドナウヴェルト(Donauwörth)とその右のインゴルシュタット(INGOLSTADT)を結ぶ線はドナウ河の流路であるが、それより北に広く分布している広大なジュラ系の南縁に当たる。始祖鳥で有名なゾルンホーフュンはドナウヴェルトの北東25 kmである。

新期モレーン。 地質図の右下にローゼンハイム(Rosenheim)という町がある。それを中心として黒い太い短線が半円形に並んでいる。これは数列の長い丘が半円を描いて壁のようにつらなっていることを示している。ブロックダイアグラムには、それが鳥瞰図で表現されている。

これは、アルプス山中のインスブルックを流れて来たイン河の谷を満たしていた氷河が、アルプスからバイエルンの平野に出たところで、ターミナルモレーンを作ったものである。その右にも小さい半円があって、その中心が白くなっているのはキーム湖である。なお、ローゼンハイムを中心とするイン河のターミナルモレーンは、東西・南北いずれも40 kmほどである。

ミュンヘンの南西では形が複雑・不規則になっているが、これはミュンヘンを流れるイザール川のターミナルモレーンと、それより西のアンメル川のターミナルモレーン、および両者の間にあるシュタルンベルク湖のターミナルモレーンが接合して複合ターミナルモレーンを形成しているためである。シュタルンベルク湖から流れ出る川がヴェルム川で、シュタルンベルク湖もまた別名ヴェルム湖と呼ばれる。

以上が新期モレーンすなわちヴェルム氷期のモレーンで、その形は形成された当時の姿をほとんど完全に保存している。ただし、あまりに巨大であるから、現地を歩き回っているかぎり、丘また丘が波のように広がっているだけで、半円形であるとか、壁のように連なっている、ということは一目で認識できるものではない(写真3, 4)。



写真3 ヴェルム氷期のモレーン。

大波のようなモレーンの丘陵は、すべて森か林か牧草に覆われているので、露頭を見ることはほとんどできない。



写真4 モレーンから掘り出された巨礫。

モレーンの丘には滅多に露頭がない。たまに家のまわりに転がっている巨礫は、整地の際に掘り出されたものである。

旧期モレーン。 新期モレーンの外側に、それを取り囲むように分布しているのが旧期モレーンである。凡例にはミンデル氷期とリス氷期と書いてあるが、主体はリス氷期のものである。この分布状態からみても、ヴェルム期よりはリス期の方が氷河が大きく拡大したことが分かる。

砂礫層。 ミュンヘンの町の周りに広く発達しているのがこれで、言いかえるとアウトウォッシュである。氷河の末端から流れ出た、という点を別にすれば、要するに流水による氾濫原堆積物であるから、日本の沖積層と同じようなものである。地形はまったく平らである。所々で立て穴式に掘り下げて砂利が採掘されている(写真5)。

氷河湖。 地質図の凡例にはないが、氷河湖についても簡単に触れておきたい。すなわち、この地域



写真5 砂礫層。

ターミナルモレーンの外方には、氷河が融けて流れ出した河川の流水に運ばれて堆積したアウトウォッシュの砂礫層がある。ほとんど水平で、かすかに成層している。日本の沖積平野と同様な低地をなしているから、普通は見えないのであるが、砂利採取のために掘り下げられたところには写真のような露出が見られる。

の氷河湖はすべてターミナルモレーンの内側において、その中で大きいもの——シュタルンベルク湖とアンメル湖（前者の西）——はターミナルモレーンの外縁に近く位置している。細長くて深いのが特徴で、シュタルンベルク湖は長さ20 km、深さ最大128 m、アンメル湖は長さ16 km、深さ最大71 mである。湖底の地形は一般に単純で、横断面はU字形である。

3. ノイシュヴァンシュタイン城

なぜこの城をたずねたか？ ドイツには、数えようによっては2万もの古城があるという。その中でもノイシュヴァンシュタイン城は、特に日本で、最も有名な城であろう。というのは、かの有名なロマンチック街道の南端、ミュンヘンの南西95 kmのフッセンという町の近くにあって、まるでおとぎばなしのお城のように愛らしく、夢のような美しい写真がすべての案内書に出ているからである。

ところが、車を運転してくれたアルント君は、大学で英文学を専攻したというだけあって、趣味が高尚であるのか、「お菓子の城」とって笑うのである。けれども私としては、どんなに冷笑されようと、この城を見なければならぬ理由がある。というのは、この城もまたナウマン博士にゆかりがあるからである。

ゆかりの第一、それはこの城をつくったのがバイエルン国王ルートヴィヒ二世だということである。先に見たとおり、ナウマン博士の学位はチャッテル教授からもらったものである。しかし、その学位記には「ルートヴィヒ二世」の名が特大の文字で書いてある。すなわち、「おそれ多くもかしこくも、バイエルン国王ルートヴィヒ二世様のしるしめしたまう、ありがたき御代に」ナウマン君は博士になることができたのであった。だから、ナウマン博士としては、ルートヴィヒ二世のことは疎略には扱えないはずである。

ゆかりの第二、そしてこれこそ私がこの城をわが目で確かめ、その石にさわってみたかった理由であるが、ナウマン博士は1893年の「フォッサマグナ」という論文の中で次のように書いている。

「次の朝、蕙を持った船頭が、我々を案内して宿を出た。彼は我々を水路へ連れて行った。そこで、1そうのかわいらしい小舟に乗った。その舟は、町の西方の水辺にある古い城の横を通って湖へ出た。我が故郷の城の建物は、たくさんの塔や尖塔を備えて、空高くそびえているのであるが、日本の城はもっと横へ広がっている。」

これは1876年夏、彼が二度目にフォッサマグナを旅行したとき、諏訪湖のほとりの高島すなわち上ノ諏訪に泊まり、翌朝小舟で下ノ諏訪へ向かったときの情景である。その城とは高島城であるに違いない。ところで、ナウマン博士が「我が故郷の城」と書いたとき、彼の頭に浮かんだ城のイメージは、このノイシュヴァンシュタイン城であったに違いない、と私は推測している。なぜかという、数多くのドイツの城のうちでも「たくさんの塔や尖塔を備えて、空高くそびえている」という情景にぴったり当てはまるのがこの城だからである。それに、この城の建設者はナウマン博士の「恩人」でもある。かつその場所はミュンヘンの南西100 kmで、博士論文のローゼンインゼルからも遠くない。

さらに、「フォッサマグナ」を書いた1893年より7年前の1886年、彼が日本からドイツへ帰って間もないころ、そしてマイセンからミュンヘンへ移り住んですぐの頃、この有名な王様は、完成したばかりのノイシュヴァンシュタイン城を追われ、ローゼンインゼルの対岸にあるベルクの城へ移され、その翌日、シュタルンベルク湖で謎の水死をとげたのであ

った。だから、さまざまな意味で、ノイシュヴァンシュタイン城は、ナウマン博士にとって忘れることのできない因縁の城ということになる、と私は推測している。

ロマンチック街道。ローゼンインゼルをたずねた日、島の撮影を終るとすぐにノイシュヴァンシュタイン城へ向かった。これは私にとって大変張り合いのあるドライブであった。なぜかという、この全行程にわたって1/5万の地形図を持っていたからである。車窓から見える山や谷や崖や集落を地図の上で確かめて行く、というのは地質家にとって大きな楽しみである。私の経験によると、この場合、1/5万がちょうどよいのであって、1/2.5万では次々と地図を取り替えるのがわずらわしい。

シュタルンベルク湖の水面は海拔584 mで、そのまわりのモレーンの丘は600 mから730 mくらい。だから深くえぐられている湖底は別として、比高100 m前後の丘陵地帯を走ることになる。これらの丘陵は雑木林に覆われ、露頭はほとんど見られない。

途中にパイセンベルクという海拔988 mの山があって、手前のパイセンベルクの町は海拔600 mだから、これはかなり目立つ山である。中新統のモラッセの山である。西本夫人が「あっ、パイセンベルク！」と感嘆符つきの声をあげたところを見ると、バイエルンでは有名な山であるに違いない。山頂まで大きな道路が通じていて、建物もたくさん記入されている。地質家仲間だけの自由な旅であれば、当然登ってみるところであるが、今は時間がない。

この辺からST2058という細い道路に入る。地質家としてはこの方がありがたい。というのは、大きい道路だと両側の切り割りも完全に被覆されていて、露頭を期待することができない。それに比べると、細い道路ぞいには、時に露頭が出ていることがあるのだ。

なお、この南のMurnau a. Staffelsee (L 8332)という図幅には、真ん中に東西に走る2列の山稜があって、その間は4 kmほど隔てられている。これはモラッセの硬い岩層がつくる山稜である。その2列の山稜が図幅の東端近くで半円形を描いてつながっている。すなわち向斜軸の東端が浮き上がって半盆状をなし、それが見事に地形に現れているので

ある。

ST2058は西へ西へと走って、やがて B17 という道路に出会う。これがロマンチック街道である。ただし、思ったほどの大きな道路ではなく、また交通量もさほど多くはない。

このあたりから、いよいよアルプスの山がま近かに迫って来る。道は南西に向かっていて、左手に山が近づいて来る。最初はフリッシュの山である。山麓には崖錐がつらなって幕状に垂れ下がっているが、地形は日本の普通の山と同様で、全面的に樹木に覆われている。その次に現れて来るのが、これはもう明確にアルプスの山で、峨々たる岩山である。近づくとつれて岩質も判別できるようになり、やがてははっきりと石灰岩だと分かる。目的地の 3 km 手前で B17 から左の細い道に入る。

マリヤ橋で。ノイシュヴァンシュタイン城を撮るにはどの地点がよいか、私なりにいろいろと調べてみた。数種類の案内書と地形図によると、光線の具合からみて、城の南方にあるマリヤ橋か、その南の道路がよさそうである。けれども、駐車場ははるか手前にあって、そこから先は車の乗り入れ禁止だから歩くほかない。歩くのは何でもないが、時間が問題である。あとは現地で工夫するほかない。ところが、行ってみると幸いなことに、駐車場から定期バスが出ていて、その終点から僅か 200 m ほどでマリヤ橋に出た。



写真6 ノイシュヴァンシュタイン城。

ルートヴィヒ二世が建設したいくつかの城のうち、最も有名なもの。石灰岩の岩山の崖の上に建っている。ナウマン博士が「わが故郷の城の建物は、たくさんの塔や尖塔を備えて空高くそびえている」と書いたとき、彼の頭の中には、この城の姿が浮かんでいたに違いない。

幅 1 m、長さ 20 m ほどの粗末な鉄橋は人とすれ違うのも難儀なほどであるが、城を眺めるのには絶好の場所である。深い谷の彼方の絶壁の上に、あやふく築き上げられた城までは距離や 300 m。その向こうにはバイエルン高地の平原が開けていて、モラッセの丘陵やフォルゲン湖・バンヴァルト湖などが見える(写真6)。ズームレンズを伸ばしたり縮めたりしてたちまち10枚以上も撮影する。

撮影を終わってみると、橋の下は数十メートルもの峡谷(Pöllat ペラト谷)で、はるか下方には水が流れているのに水音は聞こえない。橋の両端には灰白色の石灰岩が露出している。ハンマーを持っていたとしても叩くわけにはいかないが、見たところ化石はなさそうである。橋から先は点線路くらいの細い山道になっている。せめてものことと、200 m ほど歩いて引き返す。

城の石は？ 日本語の案内書には、この城のことを「白亜の城」と書いてあるが、この白亜はチョークの意味ではなくて「まっ白な」という意味であろう。定評のあるミシュランの案内書には、さすが、城は「そそり立つ塔や尖塔を備えた、冷たい感じの

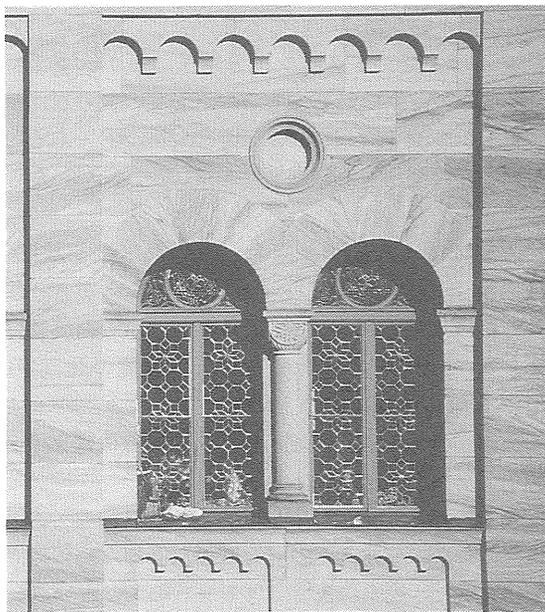


写真7 ノイシュヴァンシュタイン城のコイパー砂岩。

真っ白に輝く城の石材は、大部分が近くの白鳥の湖から運ばれた石灰岩である。しかし中庭に入ると、はるか北方の中部ドイツから運ばれた上部三畳系コイパー層の、著しくクロスラミナの発達した黄色の砂岩も用いられている。

灰色の花崗岩の巨大なマッサ」と表現されている。その花崗岩を確かめることを楽しみにしていたら、何と花崗岩ではなくて石灰岩であった。観察したかぎり、先程見たマリヤ橋の石灰岩と同じで、化石は見えない。

城の中に入ると、外からは見えないけれども黄色の粗粒砂岩も使われている。クロスラミナが顕著で、部分的には1 cmほどの石英質の円礫も認められる(写真7)。ふと気がつく、3人の男が石壁に向かって何か話しあっている。地質家? と思ったとき、西本夫人が近寄って「地質屋さんですか?」と話しかける。すると、地質家ではなくて石工だという。これはしめた、質問すると、黄色の砂岩はるか北方のヴェルツブルク〜バンベルク付近に産するものだという。さては三疊系だな、という推測は正解で、コイパー層のものである、というのは後で聞いたムラウスキー博士の説明であった。

城の石材の主体である灰白色の石灰岩は、ここから西方3 kmのシュヴァンゼーのほとりに産するという。地形図を見ると確かにその北岸に石切場の印がある。シュヴァンゼーはSchwanseeだから直訳すれば白鳥湖である。そういえば、この辺にはSchwanという語のついた名称が多い。第一に、ノイシュヴァンシュタインは分解するとNeu-Schwan-Steinで、新白鳥石である。そして、麓の村はホーエンシュヴァンガウ(Hohenschwangau)である。ただし、なぜ白鳥という名称が多いか、結局わからずじまいであった。

国境の山々。引き返すと城の北麓は海拔800 mの沖積平野である。そこから南を眺めると、城の背後は海拔2000 mの石灰岩の山で、その稜線はオーストリアとの国境である。その麓の比高170 mほどの台地状の丘の上にノイシュヴァンシュタイン城が建っている。城から背後の国境稜線までは図上で2 kmほどしかない。

仕事を終わって、フランクフルトを目指して走り始めたら、フュッセンの町を過ぎたところから渋滞が始まった。完全に止まってしまうのではないが、ノロノロ運転である。道路が町に入ると、このほか狭くて窮屈である。店先には手書きの立て看板があって、「Stau! Stau! Stau!」西本さんに聞いてみたら、「渋滞! 渋滞! 渋滞!」だという。Stauenという言葉には特別な思いがある。という

のは、ナウマン博士の論文の中にこの語がしばしば現れて、たとえば、赤石スフェノイドはStauungによって高い山となった、というのであるが、その日本語訳を何としたらよいか大変苦しんだ。結局は「積疊」という新語をつくったのであるが、この訳語もまだ満足できないでいる。

さて、帰国してから留守の間の新聞に目をおしていたら次のような記事が目にとまった。

「イラク軍によるクウェート武力制圧のニュースと前後して、ヨーロッパ・アルプスでも一つの戦争が火を噴き、今もくすぶり続けている。南北ヨーロッパを結ぶ陸上交通の要路に当たるこの地域で、大型トラックの通過に反対する住民たちの道路封鎖が連鎖反応を引き起こし、ドイツ、オーストリア、イタリア間の非難合戦に発展、欧州共同体委員会を交えての緊急交通相会議も名案はなし、二年後に迫ったEC市場統合のアキレスけんをのぞかせた。」(竹内 謙記者、朝日、10月13日)

すなわちイタリア側からいうと、ブレンナー峠を越えた車は普通はインスブルックを通過してイン河の谷を下り、ミュンヘンへ出て来る。この幹線道路上の町クーフシュタインの橋が老朽化して大型車が通れなくなった。そこでインスブルックから直接にフュッセンへ越えて来る車が溢れて渋滞を引き起こしたというわけである。ドイツとオーストリアとイタリア北東部といえ、かつては一つの国であった所でもあり、言葉も共通である。道路の渋滞がたちまち国境を越えて広がる、というところが、我々には驚きである。



写真8 ホテル レオニ。
こじんまりとしたこのホテルの前身はガストホーフレオニ、すなわち森鷗外の「レオニ客舎」である。

4. 湖畔の宿、ホテル レオニとその周辺

ホテル レオニ。 ミュンヘンでナウマン博士の旧居をたずねた日は、シュタルンベルク湖の東岸にあるドリント ホテル レオニに泊まった。ドリントというのはホテルのチェーンをつくっている会社の名前だというから、それを取り去ればホテル レオニ (Hotel Leoni) である。三階建てのこじんまりした湖畔の宿で、なかなか感じがよい(写真8)。玄関に入って正面の受付の横の壁には、全従業員——6~7人であったか——の肖像写真をかかげて紹介してある。つまり家族的なサービスをするということなのであろう。後になっていろいろ調べて確認できたことであるが、このホテルはかつて Gasthof Leoni と称した宿で、森鷗外が度々おとずれ、ドイツ日記の中では「レオニ客舎」と訳されている。

Gasthof あるいは Gasthaus というのは、直訳すると客の館あるいは客の家である。ドイツ~オーストリア~スイスの田舎町の古くからの宿はたいていこんなもので、地質家にとっては大きなホテルよりこの方がはるかに気が楽である。多くの場合、家族と少数の手伝いとで客の世話をしている。その食堂は英国のバブを兼ねたようなもので、夕方になると近隣の人々が集まって来てビールを飲み、社交の場となる。

「鷗外 闘う家長」(1972, 河出書房新社)の著者山崎正和氏は

「…そのなかでただひとつ甘い記憶になっているのは、昨年夏、『うたかたの記』の舞台ともなったシュタルンベルグ湖に試みた小旅行であった。…雨のせいレオニは思いのほかさびれていて、鷗外が投宿した Gasthof Leoni も改装中の廃墟のような姿をさらしていた。…」

と記しているが、この記述から見ても、鷗外のレオニ客舎をドリントが買収し、ホテルに建て替えたものと推察される。

ルートヴィヒ二世は水死した。ホテルの近くにルートヴィヒ二世が亡くなった場所があると聞いたので、朝食の前に行って見た。ホテルの前の通りを北へ歩くと600 mほどで石の門がある。扉は開いたままで、夜間立ち入り禁止みたいなのが書いてある。しかし、すでに夜が空けているので、かまわず進む。路は二つに分かれて、一つは水際、もう一

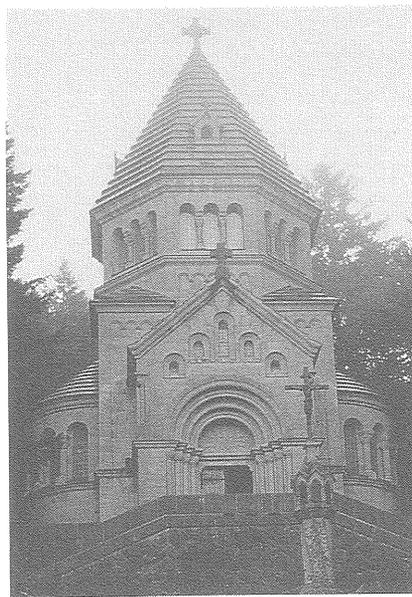


写真9 ルートヴィヒ二世のための礼拝堂。
ベルク城へ追放されたバイエルン国王ルートヴィヒ二世は、その翌日、侍医のグッデンと共に水死体となって発見された。当時ミュンヘンに留学していた森鷗外はこの事件に衝撃を受け、その後たびたびレオニ客舎を訪れ、またこの事件を題材として短編『うたかたの記』を書いた。

つはそれより15 mほどの高みを平行して走っている。あたりは疎らな雑木林で、下草が少ない点が北国らしい。足下に注意して歩くと、所々に砂礫が出ています。舗装のための砂利でなくて、基盤の砂礫層が露出しているのです。もちろんヴェルム氷期のモレーンの堆積物であるが、亜円礫から亜角礫である。

門から400 mほど行っただころで、林の中に建物が見えて来る。地図には Votivkapelle すなわち奉納礼拝堂と書いてある。湖に向かって建てられているので、上の路は堂の背後を通っている。横から回りこんで正面に出ると、中はがらんとしていて、内壁に色つきの人物画が描いてある。こちらは無神論であるから、中に入るのには遠慮してそっと覗くだけにしておいたが、何の絵だか見当もつかない(写真9)。

それよりも気になったのは、建物とその土台の石材が不純な砂質~泥質の石灰岩で、化石がたくさん含まれていることであった(写真10)。最大10 cm くらいの大きな断面があって、中にはウニかもしれ

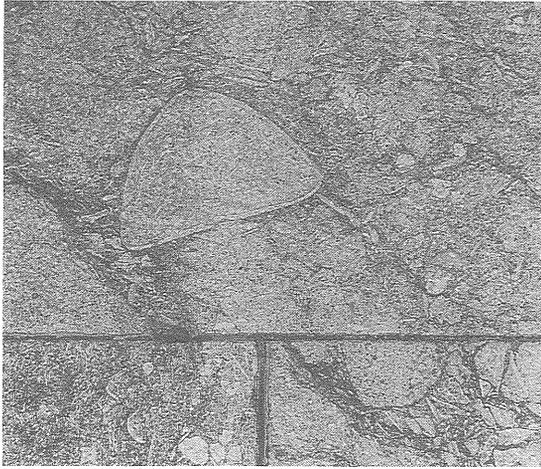


写真10 礼拝堂の化石。
礼拝堂とその周囲の石垣の砂質～泥質石灰岩は、
たくさんの化石を含んでいる。

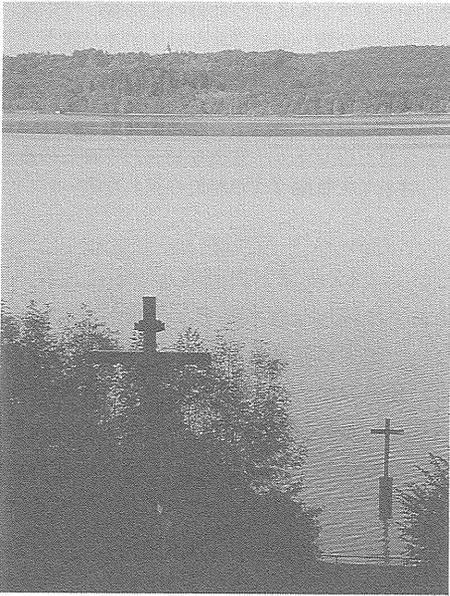


写真11 水際の十字架。
ルートヴィヒ二世が水死した地点には、水際から5
mの所に十字架が建てられている。ナウマン博士が
この王様に会ったことがあるとは考えられないが、
博士論文やら何やらで、何となく疎略にはできない
王様である。
対岸の丘はヴェルム氷期のモレーン。横から見ると
表面が平坦な段丘のように見えるが、実はかなり凹
凸のある不規則な丘陵である。この地点での湖の幅
は約1.8 kmである。

ないものがあるけれども、結局何の化石だか分からない。もしかしたら三畳系の貝殻石灰岩だろうか？とも考え、後でムラウスキー先生にうかがったが、その場所を見たことがないので分からないということであった。

さて、水際に下りると、岸から5mくらいの所に十字架(写真11)が立っている。ルートヴィヒ二世と侍医グッデンの水死体が発見されたところである。

ナウマンとルートヴィヒ二世と鷗外と。私は意味ありげな因縁話をあまり好まないけれども、この三人は奇妙にからみあっている。ナウマン博士とルートヴィヒ二世との関係についてはすでに見たとおりであるから、ここでは王様と鷗外との関係を見てみよう。

1886年3月8日、夜行列車でドレスデンからミュンヘンに着いた森鷗外は、ホイシュトラーセに居を定め、昼は医学の勉強に精を出し、夜は友人と酒を酌みかわし、日曜日には近郊の景勝地に出かけたりしていた。そして6月13日の日記に次のように記している。例によって、読みにくい言葉を現代風に改め、句読点をおぎなったりして紹介する。

「夜、加藤、岩佐とマクシミリアン街の酒店に入り、葡萄酒の杯をあげ、興を尽くして帰った。翌日聞けば、バイエルン国王がこの夜ヴェルム湖の水に溺れたのであった。

王はルウドキヒ二世〔ルートヴィヒ二世〕と呼ばれる。久しく精神病に悩まされていた。昼を嫌い、夜を好み、昼間はその部屋を暗くし、天井には星や月を仮設し、床のまわりには花木を集めて、その中に臥し、夜になると起き上がって庭園をさまよう。近頃、多くの土木事業を起し、国庫を疲弊させたので、〔関係者たちが〕その病気をとおやけにして追放した。」

小堀桂一郎氏によると、ルートヴィヒ二世は、「ヨーロッパの最後の国王らしい国王と言われ、ヴァークナーの保護者として、また幾多の華麗な王城の建設者として名高かったこの王の秘密に包まれた生活は一部の世人の注目を強くひきつけていたのであった……」

すなわち、ノイシュヴァンシュタイン城はヴァークナーに捧げるつもりで建設されたものであり、このような贅沢な城をいくつも建設したのが国家財政

を圧迫したのであり、ついに精神病の汚名を着せられて追放されたのであった。鷗外の日記をもう少し見てみよう。

「今月12日の夜、王は精神病専門医のフォン・グッデンと共に、ホオヘンシュワンガウ城からシュタルンベルク湖、一名ヴェルム湖に近いベルヒという城に移った。

13日の夜、王はグッデンと湖畔を逍遥し、ついに再び帰って来なかった。

すでに、王とグッデンの屍は湖中で発見された。

推測するに、王が湖に身を投じると、グッデンはこれを助けようとして水に入り、死をともにしたものであろう。屍を検査した者が次のように言っている。『グッデンは王を助けて水から出ようとし、その襟をつかんだのであろう。グッデンの屍は手指が傷つき、爪が裂けていた。しかし、王の力が強かったのであろうか、外套は医師の手に残り、王は深い方へ行行った。医師は王を追って王に追いつき、水底でなお王の死を救おうとしたようである。グッデンの顔には王に引っ掻かれた傷痕があった』と。」

「うたかたの記」。この事件が鷗外に与えた衝撃は大変なもので、この後、彼は度々やって来てレオニ客舎で休み、あるいは滞在して原稿を書いたりした。その後、これを題材として彼は短編『うたかたの記』を書いた。

ミュンヘン大学前のルートヴィヒ通りに近いカフェエ・ミネルワで不思議な再会をした日本人の画学生巨勢とモデルの美少女マリイは、レオニに住む彼女の養父母の家の近くでボートに乗り、岸に沿って北方のベルヒ（鷗外は Berg を北ドイツ風にベルヒと読む）の方へ漕いで行った。そこにルートヴィヒ二世が侍医グッデンを連れて現れた。

「舟にては巨勢が外套を背に背着て、蹲りゐたるマリイ、これも岸なる人を見ゐたりしが、この時俄に驚きたる如く、『彼は王なり』と叫びて立ちあがりぬ。……岸に立ちたるは、実に侍医グッデンを引きつれて、散歩に出でたる国王なりき。あやしき幻の形を見る如く、王は恍惚として少女の姿を見てありしが、忽一声「マリイ」と叫び、持ちたる傘投棄て

て、岸の浅瀬をわたり来ぬ。……」

「うたかたの記」は、昔読んだはずであるが、今回あらためて読みなおしたら、まったく初めてと同じであった。文庫本で僅か29ページだから老友諸氏も再読されることをお勧めする。ベルクからレオニにかけての風景描写はまことにあざやかである。さらに「独逸日記」を読むと、この付近の地形まで、鷗外がよく観察していることが分かる。

駁ナウマン論を書き始める。この年9月3日。鷗外は友人を見送ったあと、

「三日。…独り汽車に上り、スタルンベルヒに達し、パイエルン客舎に投じたり。残暑を避け、兼ねて著述する所あらんとす。」ところが、

「五日。ここは汽車の往復繁く、喧しきことミュンヘンの居より甚だしければ、便船してレオニに赴き、「レオニ」客舎 Gasthof Leoni に投ず。」

ここに18日まで滞在したのであるが、

「十四日。…駁ナウマン論の稿を起す。是は他日世に公にする意あれども、成否は未だ知らず。…」

実は、前に書いたとおり、ナウマン博士が「日本列島の地と民」を普通新聞に発表したのは、この年の6月26日と29日、すなわちルートヴィヒ二世の水死より2週間後のことであった。しかし、「独逸日記」には、

「二十七日(日曜)。加藤、岩佐とウルム湖に遊び、国王およびグッデンの遺跡を弔す。舟中、ペテンコオフェル師とその令孫に逢ふ。」

とあるだけで、その前後は長く空白になっている。

なお、「うたかたの記」の画学生巨勢のモデルは、ナウマンの地質調査所雇用継続を“妨害したといわれる”地質家原田豊吉の弟で、画家の直次郎であるという。

(以下次回)

YAMASHITA Noboru (1992): Visits to relations and surrounding places of Dr. Edmund Naumann, III. Starnberger See

〈受付：1991年8月5日〉